

平成26年度沖縄群島病害虫発生予報第6号(9月予報)

I 9月の気象予報

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	気 温	降 水 量	日照時間
高い(多い)	40	20	40
平 年 並	40	40	40
低い(少ない)	20	40	20

(平成26年8月21日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
沖縄群島(那覇)	27.6	30.4	25.5	260.5	188.9

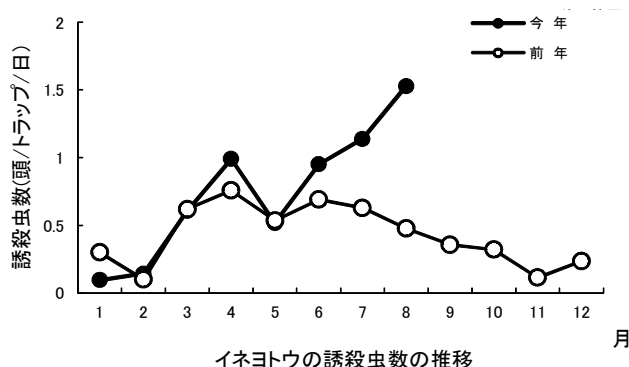
(沖縄気象台発表・統計期間1981～2010・資料年数30年)

II 9月の発生予報および防除上の注意事項

1 さとうきび

○ イネヨトウの防除対策

8月のイネヨトウ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は1.5頭(前年0.5頭)であった。



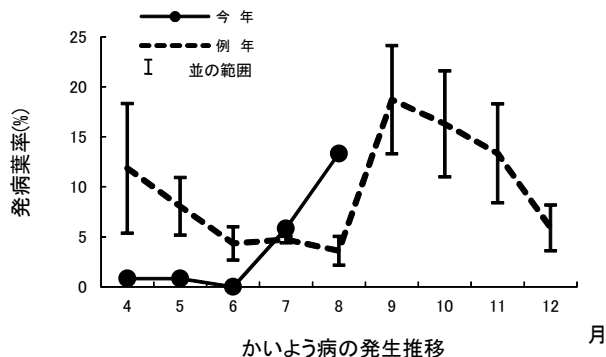
<防除上注意すべき事項>

- a ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- b 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、生育初期の防除を徹底する。
- c 圃場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- d 乳剤の場合は、葉鞘内に薬液がきちんと浸透するように丁寧に散布する。粉剤の場合は、茎と葉元の上に散布し降雨や散水等により溶解させ、葉鞘内部へ浸透させることで防除効果が高まる。
- e 植付け時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。
- f 本号コラム「夏植の植付け時におけるイネヨトウの防除対策について」(p16)参照。

2 シークワーサー

- (1) かいよう病
 発生程度 : 多
 予報の根拠

8月下旬の調査の結果、発病葉率は13.3%（前年4.2%、平年3.6%）と平年より高かった。



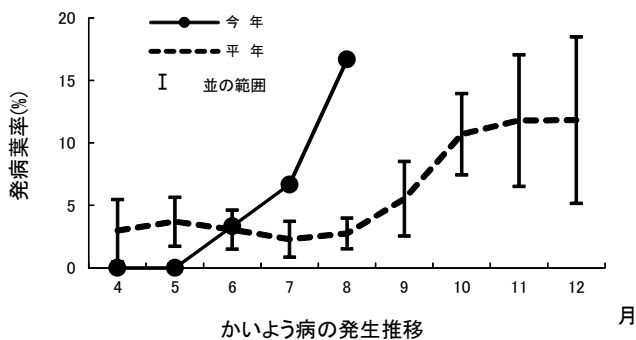
<防除上注意すべき事項>

- 罹病した枝葉及び果実は、伝染源となるので除去する。
- 台風通過前に薬剤防除を行うと効果的である。

3 タンカン

- (1) かいよう病
 発生程度 : 多
 予報の根拠

8月下旬の調査の結果、発病葉率は16.7%（前年1.1%、平年2.8%）と平年より高かった。



<防除上注意すべき事項>

- 罹病した枝葉及び果実は、伝染源となるので除去する。
- 台風通過前に薬剤防除を行うと効果的である。

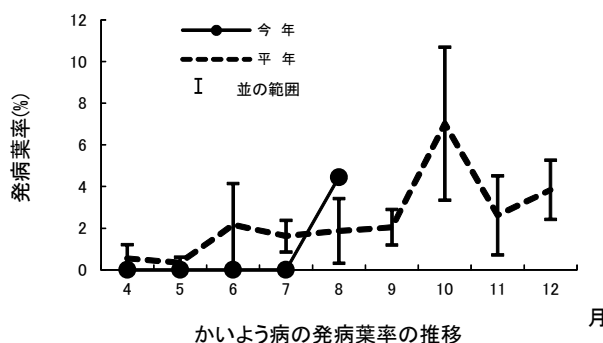
4 温州みかん

(1) かいよう病

発生程度 : やや多

予報の根拠

8月下旬の調査の結果、発病葉率は4.4%（前年8.9%、平年1.9%）と平年よりやや高かった。



<防除上注意すべき事項>

- 罹病した枝葉及び果実は、伝染源となるので除去する。
- 台風通過前に薬剤防除を行うと効果的である。

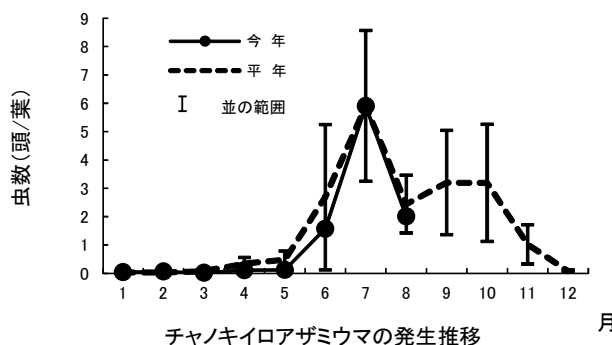
5 マンゴー

(1) チャノキイロアザミウマ

発生程度 : 並

予報の根拠

8月下旬の調査の結果、葉当たり虫数は2.0頭（前年5.4頭、平年3.2頭）と平年並であった。



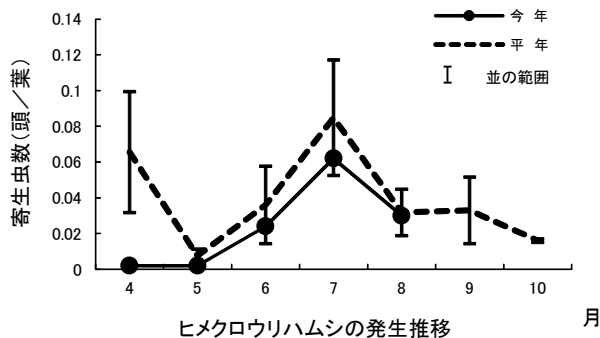
<防除上注意すべき事項>

- 収穫期に発生の多かった施設では、不要な新梢等を除去したのち、薬剤による防除に努める。
- 剪定後の新梢の発生が早い施設では、本種の発生時期が早くなることから、新梢をよく観察し、初期防除に努める。
- 発生源となる施設内外の雑草を除去する。
- 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

6 へちま

(1) ヒメクロウリハムシ 発生程度：並 予報の根拠

8月中旬の調査の結果、葉当たり成虫数は0.1頭未満(前年0.01頭未満、平年0.1頭未満)と平年並であった。

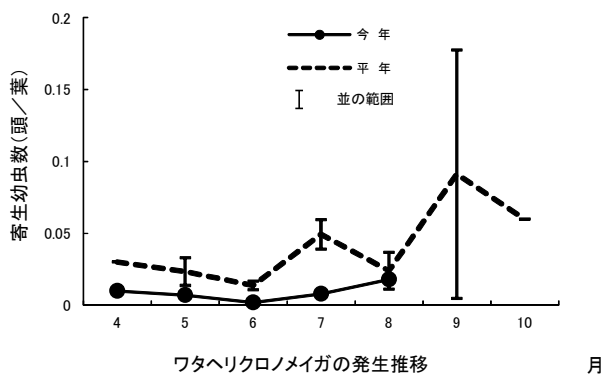


<防除上注意すべき事項>

- シルバーテープなど光反射資材を利用し、成虫の飛来防止に努める。
- 圃場内外のウリ科雑草は発生源になることから、根も含めて除去する。
- 産卵防止のため、地際部をシートなどで覆う。
- 動きの鈍い午前中に成虫を捕殺する。

(2) ワタヘリクロノメイガ 発生程度：並 予報の根拠

8月中旬の調査の結果、葉当たり幼虫数は0.1頭未満(前年0.1頭未満、平年0.1頭未満)と平年並であった。



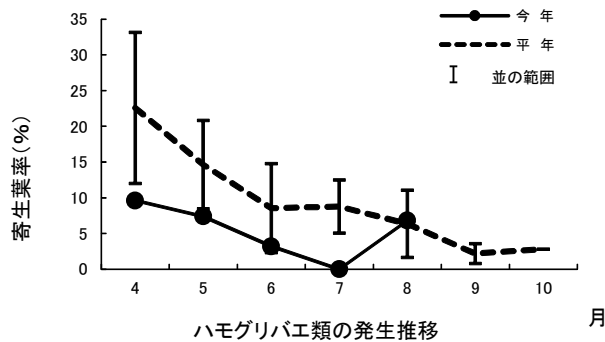
<防除上注意すべき事項>

- 老熟幼虫は巻葉内にいて薬効が低いので、若齢期の防除が望ましい。
- 殺虫剤は、若齢虫が生息する葉裏に掛け残しがないよう丁寧に散布する。

(3) ハモグリバエ類

発生程度：並
予報の根拠

8月中旬の調査の結果、寄生葉率は6.8%(前年0.4%、平年6.4%)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

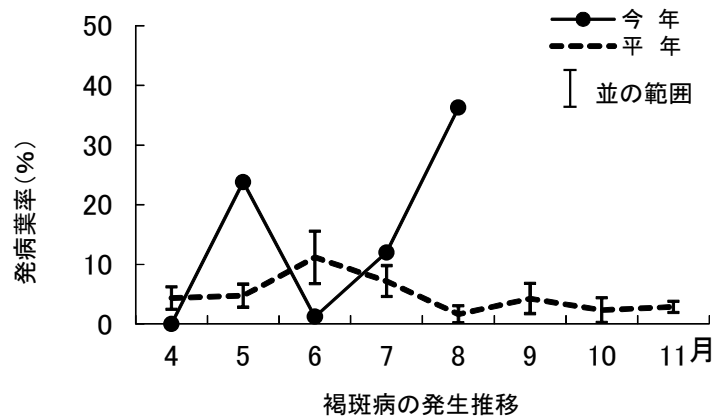
- a 圃場内外のウリ科・ナス科・マメ科などの雑草は発生源になることから、除去する。
- b 幼虫期間が比較的短いため、葉の表面に産卵痕や食害痕がみられたら防除を開始する。
- c 農薬やその他の防除資材の効果の判定は幼虫の体色で判定する。生存時の幼虫の体色は黄色で、死亡すると黒変する。

7 きゅうり(施設)

(1) 褐斑病

発生程度：多
予報の根拠

8月下旬の調査結果、発病葉率は36.0%(前年0.4%、平年1.6%)と平年より高かった。



<防除上注意すべき事項>

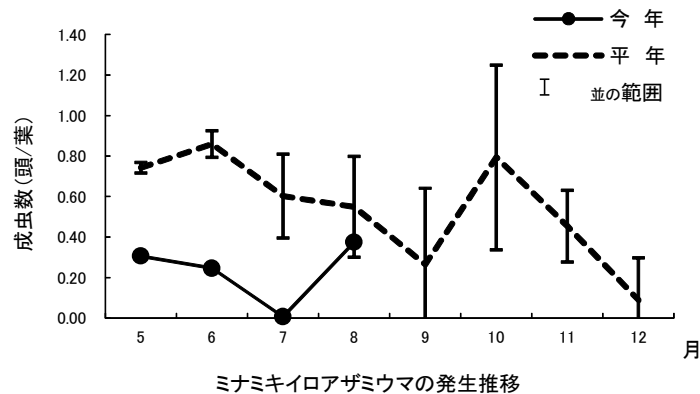
- a 多湿にならないよう、施設内の換気に注意する。
- b 下葉の老葉を早めに除去し、圃場外に持ち出し処分する。
- c 薬剤耐性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

(2) ミナミキイロアザミウマ

発生程度：並

予報の根拠

8月下旬の調査結果、葉当たり成虫数は0.23頭(前年1.22頭、平年0.55頭)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- 本種は灰白色斑紋病や黄化えそ病の媒介虫である。
- 施設周辺の雑草は本種の発生源となるので、除草を行う。
- 施設開口部には目合いの細かい防虫ネットを展張し、本種の侵入を防止する。
- 摘芯や摘葉後の残さは、本種の発生源となるので、ビニール袋に入れるなどして密封し、施設外に持ち出し処分する。
- 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

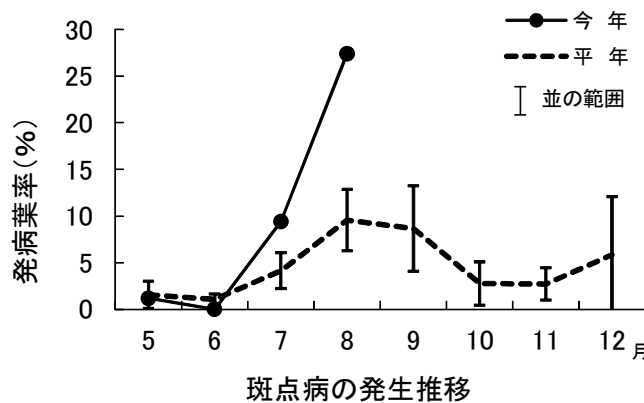
8 にかうり(施設)

(1) 斑点病

発生程度：多

予報の根拠

8月下旬の調査結果、発病葉率は27.4%(前年6.8%、平年9.6%)と平年より高かった。

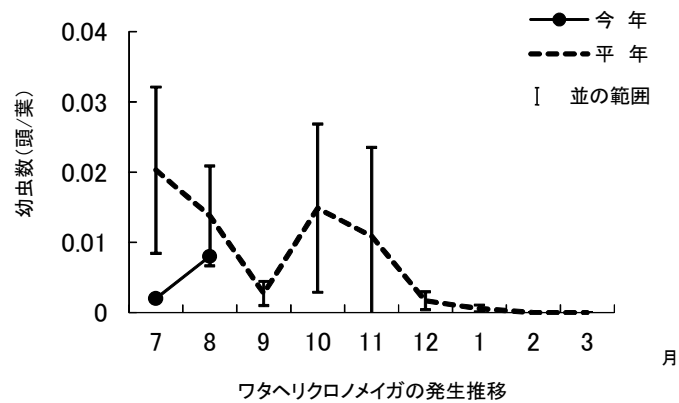


<防除上注意すべき事項>

- 老葉や病葉は発生源になるので除去し、圃場外に持ち出して処分する。
- 多湿にならないよう、施設内の換気に注意する。
- 中～下位葉をよく観察し、早期発見・早期防除に努める。

(2) ワタヘリクロノメイガ
 発生程度：並
 予報の根拠

8月下旬の調査結果、葉当たり虫数は0.1頭未満(前年0頭、平年0.1頭未満)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- a 幼虫は葉だけでなく果実やつるを食害するため被害が大きくなる。
- b 老熟幼虫は巻葉や果実内に隠れて防除が困難になるので、発生初期の防除を徹底する。
- c 殺虫剤は、若齢幼虫が生育する葉裏に掛け残しが無いよう丁寧に散布する。
- d 施設出入口は防虫ネットを展張し、本種の侵入を防止する。